

「Can-Doリスト」評価で生徒自身が成長や課題を把握

由利高校

秋田・県立

取材文／伊藤敬太郎

生徒の積極性を育むため キャリア教育を見直す

現在のキャリア教育における課題の一つが「評価」。さまざまなプログラムを取り入れてはいても、それによってどれだけ生徒が成長したのかを、教員、生徒ともに客観的に把握することはなかなかできていないのが多くの高校における現状だろう。そんななかで注目すべき取り組みをしているのが由利高校だ。

女子校だった同校は2007年度に共学化。同時に、普通科に加えて、理数科と国際科が設置された。現在のかたちでのキャリア教育がスタートしたのは、秋田県のキャリア教育実践モデル校に指定された2012年から。当時の由利高校はある課題を抱えていた。

「本校は、あいさつや礼儀、友達や周りの人を大切にするといった人間教育に関して意識して取り組んできた

伝統があり、生徒たちもしっかりやれています。ただし、勉強にしても、部活動にしても、自分から積極的に行動することに關しては物足りない面があります。一方で、共学化を契機に進

学者の割合は増えており、特にAO・推薦で受験する生徒が多いことから、『素直なだけでは厳しい。もっと積極性や自主性を身につけさせないと』という認識は教員が共通してもっていました。「進路指導部副主任／佐々木望先生」

それまでもディベート、新聞記事の切り抜き、インターシップ、課題研究といった、いわゆるキャリア教育に類する教育は行っていた。しかし、それらが生徒を劇的に変えるまでには至っていなかったという。

「一つひとつの取り組みが単発で自己目的化してしまっていた面があったと思います。また、学年主任や担任の意識の違いで力の入れ方にも差がありました。そこで、キャリア教育の観点

から、すでにあるプログラムや行事について、何のためにやるのかを改めて考え、内容や実施時期などを整理しました（佐々木先生）

例えば、1年次に行う新聞ノートの作成を、新たに振り返りの機会を設けることで2年次の課題研究のテーマ選別に連動させるなど、つながりや積み重ねを意識して3年間の一貫した全体計画を作成。全教員が共有できるようにした。

基礎的・汎用的能力を基に Can-Doリストを作成

2014年度からは、全体計画をベースに生徒が3年間使用するキャリアノートを導入。生徒自身が、キャリア

教育に関して自分が積み重ねてきたもの、これから取り組むことを俯瞰してとらえられるようになった。また、この一冊にワークシートが集約されているので、個々の教員が、授業ごとにシートを作成する手間に煩わされず、

指導に専念できる体制も整えることができたという。

一方、イベントをこなすだけで終わらせないためには生徒が自身の成長を評価

できるしくみが必要だと考え、佐々木先生が作成したのが「Can-Doリスト」(図1)だ。文部科学省が定める基礎的・汎用的能力を参考に由利高校の生徒に身につけてほしい63項目をリストアップしたチェックリストで、生徒が自分自身で「できる／できない」を判断して回答するもの。これが同校のキャリア教育における軸となっている。

全体は、「学習への取り組みについて」「学校生活の過ごし方・人間関係について」「進路計画とその実践について」「部活動、体験活動、地域との関わりについて」の4つのシーン別に構成。各シーンに10〜20弱のチェック項目が設

School Data

1920年創立／普通科・理数科・国際科／生徒数553人(男子211人・女子342人)／進路状況(2013年度実績)大学46.9%・短大11.9%・専門学校23.7%・就職14.1%・その他3.4%



進路指導部副主任
理数科主任 第3学年
佐々木 望先生

生徒が自分自身の現状を把握するためのツール

「生徒自身が、今の自分のできることで、できていないことを把握すること、目的として導入しました。集計した数値で個々の生徒を評価するためのもではないので、回答方法はシンプルに『できる』と思った項目に○をつけるだけになっています。また、すべての項目をしっかりと読むことで、今後自分がどんな力を身につけていけばいいかを知ってほしいというのねらいの一つです」

「生徒自身が、今の自分のできることで、できていないことを把握すること、目的として導入しました。集計した数値で個々の生徒を評価するためのもではないので、回答方法はシンプルに『できる』と思った項目に○をつけるだけになっています。また、すべての項目をしっかりと読むことで、今後自分がどんな力を身につけていけばいいかを知ってほしいというのねらいの一つです」

2年生の9月、12月と3年生の9月。複数回取り組むことで自分の成長を自覚できるようになっている。

このCan-Doリストのねらいについて佐々木先生はこう語る。

「生徒自身が、今の自分のできることで、できていないことを把握すること、目的として導入しました。集計した数値で個々の生徒を評価するためのもではないので、回答方法はシンプルに『できる』と思った項目に○をつけるだけになっています。また、すべての項目をしっかりと読むことで、今後自分がどんな力を身につけていけばいいかを知ってほしいというのねらいの一つです」

一般的に、生徒は「人付き合いが苦手」といった程度の自覚はあっても、現実に何を改善すればいいかまではイメージしにくいもの。Can-Doリストではその点が具体的につかめるというメリットがある。

「ポイント」は日々の指導にCan-Doリストの要素を取り入れることですね。例えば、きちんと計画を立て、状況に応じて計画を修正することの必要性を定期考査の前に指導するなど、適切なタイミングで意識させることが大切です。それによって、生徒はより

図1 由利高校「Can Doリスト」(一部抜粋)

scene1 学習への取り組みについて

ダウンロード可

1年	適切な学習習慣の確立と自己理解	○
A	授業などにおけるルールを守って学習活動に取り組んでいる	
B	自分の得意な教科、興味のある領域を自覚している	
B	授業中に、指名されなくても自分の考えをもっている	
A	他人の発言を、理解しようと思いつながっている	
C	定期考査の前に計画を立て、取り組んでいる	
D	授業などで取り組んでいることは、将来の自分の力になると考えている	
2年	自己の適性や興味を理解して伸長する	○
C	わからないことや興味のあることを調べたり質問したりできる	
B	興味のある学習には進んで取り組み、努力を継続できる	
A	自分の考え方や解き方を他人が理解できるように説明できる	
D	将来の目標を実現するために目標を設定できる	
C	考査前の学習計画を、結果を分析して修正できる	
B	学習へのモチベーションを高めるために方法などを工夫できる	
A	他人の考え方や解き方に目を向けることができる	
3年	学習した内容を活用する	○
D	自分がなりたい職業に関わることについて、情報を収集し探究できる	
C	成功や失敗の経験を通して、方法や計画の続行や修正をすることができる	
A	自分と他人の考え方や解き方の違いを比較し、よいものを吸収できる	
C	以前学習した内容、他科目で学習した内容との関連に気づくことができる	
B	学習の成果があらわれなくても、あきらめずに学習を継続できる	

A: 社会とつながる力 B: 自分を見つめる力 C: 見つけて動く力 D: 前へ進む力

現実の場面と結びつけて考えられるようになっていきます」

2年次には、Can-Doリストの結果を自分で分析し、目指している職業で必要とされる能力と照らし合わせて、どんな力を磨いていけばいいかを考える時間も設けている。このような指導を通して、生徒はCan-Doリストの項目が将来の仕事と結びついていることも認識していく。

このほか、全体・学年別などの数値の集計・分析結果は、授業内容や指導

の改善にも応用できる。

「予想されていたことですが、本校の場合、『社会とつながる力』『自分を見つめる力』は比較的良好で、『見つけて動く力』が弱いという結果が数値でも出ています。この点は授業改革などに反映していこうと教員間で話し合っています」(佐々木先生)

育みたい生徒像を明確にし、生徒の振り返りを通じた自己成長を主眼として設計された同校の評価のあり方から学ぶことは多そうです。